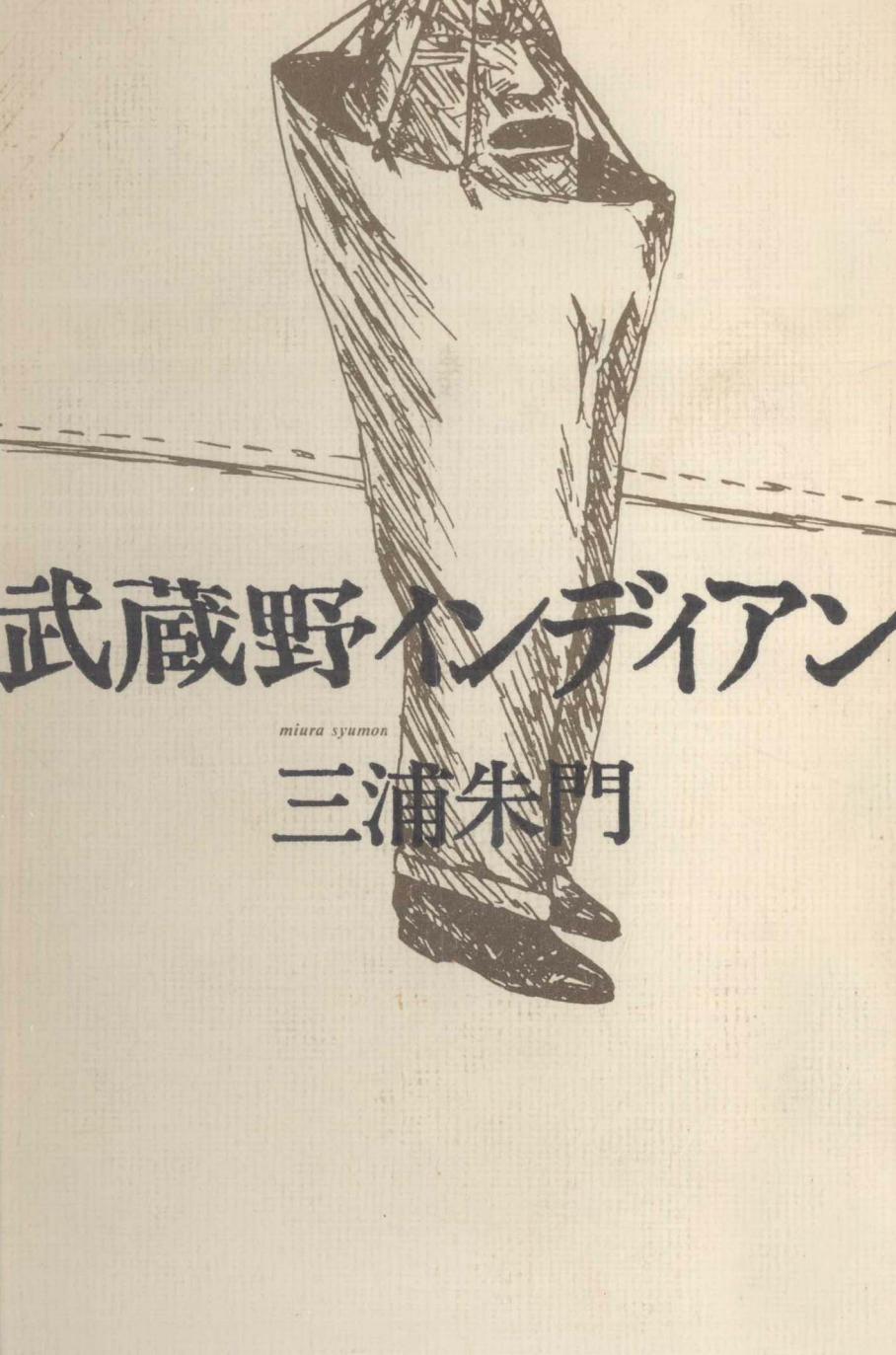




武蔵野インディアン

miura syumon

三浦朱門



武蔵野インディアン

三浦朱門

武蔵野インディアン

昭和五十七年七月二十日 初版印刷
昭和五十七年七月三十日 初版発行

著者 三浦朱門

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 (〇三)四〇四―一二〇一〈営業〉

(〇三)四〇四―八六一一〈編集〉

振替 東京〇―一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

©1982 SHUMON MURA Printed in JAPAN

定価は帯・カバーに表示してあります

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

目次

先祖代々

5

武蔵野インディアン

67

敗戦

125

解剖

191

武蔵野インディアン

装画 田中靖夫
装丁 菊地信義

先祖代々

一

公害や車の排気が新聞キャンペーンの中心であったころ、中央線の吉祥寺、三鷹あたりでも、車公害がひどくなってきたという記事が新聞に出て、境駅前商店街の倉屋の主人の言葉として、「とにかく、朝から車の列がビッシリで、道の向う側に行くにも、車を縫って歩く始末で。それが一斉にエンジンかけてますでしょう。ポッポッポッポッ、排気ガスで頭が痛くなりますよ。何とかならんもんですかねえ……」

と書かれてあるのを見て、久男は笑い出してしまった。笑ったのはその言葉ではない。新聞の倉屋の説明に、先祖代々ここで食料品屋をやっている、とあったからだ。久男は当時で四十年、今からでは五十年ばかり前、境に住んでいた経験がある。そのころ、倉屋は新来者、よそ者とし

て、土地の人から白眼視されていたのである。あるいは四十年もたつと、倉屋は先祖代々と言えるほど老舗になり、農村から住宅地に変貌した境には新しい店が軒を並べるようになったのであろうか。

久男の住んでいたころ境の商店の成長株というと、倉屋と、福音書店と上原パン店だった。ほかの店の木造部がチヨコレート色だったのに、この三軒は木口も新しく、店は明るく、商品さえ色彩的で、月々、売り上げをのばしてゆく、という印象をあたえていた。

元々、境は繭の市のたつた所で、それで駅もできた——あるいは駅ができたので、そこに市がたつた——土地だという話だった。駅前の商店街といっても、久男の記憶ではほとんどの家がしもた屋であつたけれど、その中の一番大きな家は、建てつけは粗末であつたが、軒が深く、その下に幾つも縁台のようなものを並べていた。あるいは、これが繭の取引場で、荷車やリヤカーで繭を運んできた養蚕農家は、縁台の上に大きな籠ごと繭をのせ、商人に売りわたしたのかもしれない。しかし久男の記憶する限りでは、ということはずくなくとも五十年前にはもう、ここがそういう目的に使われたことはなかった。もっとも、商店街からすこし離れた所に、トタン屋根で吹きさらしの野菜の集荷所があつて、ここで商品となった蔬菜類は、駅から都会に出荷されていた。

境を繭と蔬菜の集散地としてできた町と考えている人は、関東大震災後、郊外に移ってきたサラリーマンである久男たち新来者と、彼らを相手にしてもうけている三軒の商店を快く思わなか

ったであらう。しかし新来者にとっては、都会風の食料品、パン、書物などは必需品だったのである。久男たち親子が境に移って行った昭和の初め、境には本物の肉屋も魚屋もなかった。

魚はごくたまに行商が自転車の荷台に、主に干魚とか粕漬けにした切り身をのせて売りに来た。肉は久男の姉の敏子の同級生で、ブタ屋のキミちゃんと言われる子がいて、彼女の家が屠場に近くて、そこと関係があるのか、豚肉を売っていた。無い日もあった。久男の家では、自然、豚肉を愛用することになったが、姉の敏子は、ブタ肉を買いに行けと言われると、

「あ、今日はブタ肉ないって言ってたわ、キミちゃんが……」

と言うことがあった。それはその通りではあったのだろうが、自転車で二キロ近くも買いにゆかねばならない敏子は、こういう嘘でお使いをサボったのかもしれない。

そこで、幼年時代の久男にとって、もっともなじみのある牛肉はアルゼンチンのコーンビーフであった。この黒と赤のラベルのカンヅメは倉屋でしか売っていなかった。食料品屋はもう一軒あった。こちらは単に酒屋と呼ばれていた。久男はこの店が嫌いだった。暗い、穴蔵のような店で、一隅に酒、醤油などの樽が呑口を下にして並んでおり、店の中は概ね味噌桶とか、ビン詰の醤油で占められていた。天井から酒のポスターが何枚も下っていて、そのどれもこれも埃をかぶって、たとえば折角の美女の額と喉のあたりに、横に幅二センチほどの埃の帯があった。

久男がこの店を嫌いになったのは、親爺がいやだったのである。久男の母は、彼に酒屋で塩を買ってくるように、と言いつけた。酒屋は普通名詞であると同時に、久男にとっては固有名詞で

あった。それとも専売法か何かで、酒と食塩は古い店である「酒屋」でしか扱っていなくて、倉屋の方では、角砂糖やコーンビーフはあっても塩は売れなかったのだろうか。

親爺は木肌がじっとり湿気を帯びているような木の太箱の蓋を開けて、新聞紙で作った紙袋に純白の塩をしゃくい入れながら、

「安いなあ、こんなに売って五銭」

と、さもいまいましげに言った。久男の父は酒に無縁な体質の男だったから、「酒屋」のお得意ではなかった。従って久男の家は食塩を買う時だけ、この店の客になったという可能性が大きい。久男の母のサトもそれが気づまりで、彼を使いに行ったのだろう。「酒屋」の親爺は、そういうことのすべてが面白くなかったのではあるまいか。食塩を売れるというのは、専売法上の特権ではあっても、利益はほとんどない。そこで食塩しか買わない客などというのは、「酒屋」にしてみれば、有難迷惑なのだ。しかも販売拒否をすれば、食塩販売の特権を取り上げられる。

また、肉屋、魚屋と言うに足るものがないのと同じく、八百屋もそれらしい店はなかった。久男たち新来者の住宅のポツポツ建っている畑や雑木林の間に、勉強屋という八百屋風の家があった。しかし、ここは、市場から青物を仕入れるのではなく、主人の爺さんが自転車に乗って、あちらこちらの畑を手伝って、ついでに、収穫を買ってくる。だから、この土地で、その時期にとれたものしか売っていなかった。

「おじさん、ニンジンないの？」

と聞きに行くと、不精鬚の延びた顎をポリポリ搔きながら、

「ニンジンだあ？ たしか、連雀の方の秋元の分家で二うねばか作ってたっけ。よし、夕方までに持ってきてやんべ。五六本もあればいいかね」

といった具合だった。勉強屋というのは正式の屋号ではなくて、注文を取る際に値段をたずねられても、商品をこれから仕入れるのだから、答えられるはずもなく、「勉強しとくよ、奥さん」としか言わなかったから、勉強屋なのである。久男などは勉強屋は家に帰ると、本当に机に向ってノートをひろげて、勉強して青物の値段を計算するのだと思っていた。

勉強屋の裏は竹やぶで、縁の下にも土間にも竹の子が出てきた年があった。久男は勉強屋の爺さんが畳をあげる手伝いをして、見事な竹の子を一本もらってきたことがある。

小学校の夏休みは八月一ヶ月だったが、六月と十月に、それぞれ数日間の麦刈り休みとイモ掘り休みがあった。久男のように農家でない家の子弟にとっては、ただの休暇だったが、同級生に頼まれて、子守りの手伝いに行った。つまり、一日中、何ということなく、同級生の弟や妹を背負ってくらすのである。

麦には実の殻にノギという針状の堅い毛がある。庭一面に干した麦の穂を、回転する腕のある農具で打って脱穀する際に、ノギが日の光にキラキラ光りながら四散する。それが首筋から背に入るとシクシクと痛痒く、そこは汗がしみれば虫に食われたように赤くはれた。

この時期になると勉強屋は麦刈りに動員されて店を閉めた。そのほか、春から夏にかけては彼

には茶揉みという特殊技術があったので、午後店を閉めることが多かった。

梅雨前の茶つみは境では子供のアルバイトといった感じがあって、日曜に友達の家遊びに行く、皆、ザルを持って茶畑にいたので、久男も仕方なく、友人のザルに若草色の葉をつんでいれながらおしゃべりをする以外に、遊びようがなかった。

茶をつんでいて、雨になれば子供たちは勉強屋が茶揉みをしている小屋に避難した。勉強屋は赤い襦袢だけで、大きな爐の上にのせた、畳一枚ほどの茶揉み台の前に立つ。彼がいるのは小さな小屋の中だが、そこはサウナの中のように熱く、乾燥していた。だから雨に濡れた服を乾かすにはそこが一番なのである。

茶揉み台は、柳行李の底面積を大きく、深さを浅くした作りで、トタンの上に和紙をはってあった。光沢のある若草色の茶の葉がこの上にあげられると、台の下からの熱気によって、からいり、されるのと同じことになる。熱と乾燥度が均一になるように、勉強屋が、台の上の葉をかき廻し、数珠を押し揉むようにして空中にほうり上げて、湿気を発散させる。だから小屋の中はたちまち香ばしい匂いに満たされる。しかし暑くて、長居のできる場所ではなかった。

勉強屋は時々、襦袢一本のままで小屋を出て行くと、ヤカンの口に唇をあてて喉仏をグリグリ上下させて水を飲み、ついでに塩を一なめして、また小屋の中に戻った。

久男が小学校四年ころ、冬の木枯らしをさけて、穴を掘ってキャンプごっこをしていると、勉強屋がやってきて、

「野火に気いつけろよ」

と言った。久男たちは穴の一隅にカマドを作って、そこに火を燃して暖をとっていたのである。
「おじさん、そんなこと言っていないでさ、穴の中に入れよ」

と久男が言うと、昼間だというのに、どこかの振舞酒にありついたらしい勉強屋は、赤い顔を振りたてながら、

「わしや、まだ、穴にへえるにや、はええ（早い）」

と言って、どこかへ行ってしまった。そのくせ、勉強屋は、翌日、深さ一メートル半ほどの灌漑用水路に落ちて死んでいるのを発見された。原因は脳溢血だった。脳溢血をおこしたので、用水路に倒れこんだのか、足を踏み誤って用水路に落ちたショックで脳溢血になったのかは、久男は知らない。しかしそのころ、昭和も十年ころになると、もう商店街には八百屋も肉屋もできていたし、勉強屋は昼間から酔っ払っていられるほど暇になったのだ。

二

後から考えてみると、久男が麦刈り休みとイモ掘り休みにはじめて子守りをしたのも、勉強屋から竹の子をもらったのも、「酒屋」から塩は安いとイヤミを言われたのも、どれも小学校一年の時に違いない。この年、久男は小学校に入ったばかりでなく、自転車に乗ることも覚えたので、

世界と行動範圍が急に拡がり、それまで両親や姉としか接しなかったのが、急に違う人々と接し、それらの体験を印象的に記憶するようになったからだ。

小学校一年の冬の終りころ、雪の降りそうな曇り空の下で、久男は原っぱの踏み分け道を自転車に乗って遊んでいた。原っぱはかつては農地だったのを、東京の不動産会社を買って、宅地として売り出した地所であった。ところが、一区画も売れずに、そこは草ぼうぼうの原っぱになった。近くの住民たちは駅や駅前の商店街、小学校などに行くために、長方形の宅地跡の原っぱに対角線を引く形の踏み分け道を作った。

宅地に造成した際に井桁状につけた道は数十センチ低くされていたから、原っぱの対角線の踏み分け道を自転車で走ると、ローラーコースターのような、波乗り運動を楽しむことができた。

その日久男がこの遊びを繰返していると、体は温かいのだが、耳や鼻の頭は冷たくなり、唇もこごえてちぢみあがつて齒がむき出しになる。それで時々、久男は自転車を止めて、顔や耳をこすらねばならなかった。

休んでいる久男の目に、灰色の空の下、すすきの枯れ葉が北風に波打っている原っぱを、駅の方から一人の男がやってくるのが見えた。黒い学生帽をかぶっている。黒いマントを羽織っているが、それは首の留め紐のボタンをかけているだけだから、メフィストフェレスのそのように裾拡がりになって風になびき、下の金ボタンの学生服が丸見えだった。男は小さな茶色のトラントクを持ってゐる。近づくと、黒い学生帽には汚れた白線が二本巻いてあったが、徽章はなく、